

苦しい、悲しい夜

井 上 文 子

昭和二〇年一月一六日も終わらんとしていた二三時二〇分ごろ、不意の米軍による盲爆のため屋根は吹っ飛び、暗闇の夜空には、冷たい星が輝いていました。

来客のため眠りについたらばかりの一家のものは、投爆のため破れた柱や壁の下敷の中で目が覚めたのでした。

でもそのときは、みなそれぞれ負傷をしていたのでした。

主人は顔面と手足に、私は左眼に、中学二年で一五才の次男は、破片貫通のため、右足の脛けい骨や、腓骨ひびを肉もろとももぎとられ、完全骨折をうけたのでした。そして小学校五年で一二才の娘は即死。さいわいにも、次女で小学校二年で八才の小さな子だけは無傷で助かったのでした。

主人の義弟がちょうどきていました、ガラスの破片が眼球にささり片眼失明し、いまは義眼によって毎日憂き目をみえています。

六 馬 町 学徒動員で名古屋に行っていた長男は、五月一八日の大空襲で工場が破壊されたため、配置転換で舞鶴へ回されたが、ここでも、またまた七月二九日の空爆にありました。そして多くの級友が負傷し、また死亡しましたが、さいわいに無事で八月の敗戦を迎えてくれました。

思えばあの一月一六日は、苦しい悲しい夜でした。

足の骨が折れた次男は、担架で小学校へ運ばれたが、傷の手当てもしてもらえず、すぐに八坂病院（現洛東病院）に転送されました。私は目から血が流れていましたが、自分のことなどかまってはいられませんでした。息子の傷と痛がる声をきいては、なにも感じ考えるどころではありませんでした。

壊れた家の中には、即死した娘がそのままにしてありましたが、かまってやることすらできませんでした。

この病院で仮手当てをうけ、あけ方になってから府立病院の外科病棟に正式に入院し、治療をうけることになったのでした。

翌日、軍から見舞いにはこられたように記憶していますが、軍人様々の世の中ではありましたが、こんなひどい目にあわせた軍のやり方が憎くてしかたありませんでした。

勝目のないのに、まけていた戦争でさえ勝った勝ったと国民をだまし続けていた軍には、口にこそ出して言う人はなかったが、不平たらたらでした。一緒に負傷した人たちは、寄ると誰言うことなく、軍のやり方やもろもろの悪口ばかりでした。

家は壊され、家財は何ひとつとして満足なものがなく、着たきりの姿での病院ぐらしがはじまったのでした。

長い長い病院生活がはじまったのです。一月一七日から一〇月一五日の退院まで満九か月、一発の投下爆弾によって生まれた悲劇の数々を味わったのでした。

私と同じ悲しみを味わったご家庭が数一〇軒もあり、母と子、子供さん二人とそれぞれ違っ

たケースはあったが、悲しみはみな同じでありました。

府立病院では、入院当時総部屋に入れられていましたが、私の入院や次男の看病、そして空襲のたびに避難することのできない重傷のため、鉄筋の病棟の個室に移りました。

病院の差額料金は個人負担で、長い入院で相当の出費でした。

生活必需品である炊飯用の鍋、こんろ、お茶碗などは、市当局よりの配給をうけましたが、居住町内会からの配給は受けることが少なかったので、子供の栄養補給食を与えることができず骨折の治療にも差支えることが多くありました。

そのため主人は休日になると、魚や煮干しの買い出しに伊勢方面へ行っていました。

脛骨がのびてつながるまで、おもりでつねに足を引っばっている子供の姿を見ると、本当に米国が、軍が憎くてしかたありませんでした。

ベッドに寝たまま手鏡に映る東山や加茂の川原、その辺に遊ぶ子供らの姿を眺めて、時のうつり変わりを感じていた子供の心情を思い、こんな悲しいことはありませんでした。

自分の目の不自由なんか問題でないと思いました。

初秋に入って、やっと傷口もふさがり、骨もつながったので、松葉づえで立てるようになってきたときの嬉しさは、いままでの苦しみと辛抱が長かっただけに、言葉にはあらわせない喜びでありました。

このときは戦争も終わり、占領米軍のもとで国民は働いていました。放出物資で生きていました。

敗戦になると世間の人々も水くさいものでした。戦争中であれば戦災者と言ってくださる方

もいしましたが、終わってしまえば、われがちになっ
てしまいい、見向きもしないようになってしま
まっています。

一〇月一五日に、松葉づえに頼ってやっ
と歩くことのできる子供と片目の私が退院した
ので。本当に長い九か月でした。それからまた、
こんどは母と子の通院姿が続いたのです。
一家五人がまがりなりに一緒に暮らせるよ
うになったのは二一年の四月からでした。いま
ま
で田舎へ預けてあった末娘も帰って来るし、
以前住んでいた近所に借りてあった借家に無
一物ながら楽しい一家を作ったのでした。あの
とき死んだ娘の位牌と一緒に暮らしてから早や
二七年たちました。

どんなことがあっても、戦争だけはしてほ
しくありません。子、孫の代になっても、戦争
はしないようにと願っています。

軍備には絶対反対をせねばならないと思
います。つらい苦しい目をみたものにとっ
て、とくにそう思います。

思えばいやな昭和二〇年一月一六日二三時二〇分。

二七年過ぎたいま、まだまだ思い起こせば、
いろいろこまかいことがつぎつぎに浮かび
ます。筆にはできず、ただ思い出の手記として。